

第4回検討委員会までの意見整理 <概要版> (第4回で出た意見と重複する箇所を網掛けで示し、そのうち第4回の意見で新たに追加した箇所を下線で示す)

Q1. 検討の進め方はどうあるべきか？

- ①まず先に何をやる場なのか考える、 ②過去の事例に学ぶ、 ③他の被災地に聞く、 ④行政的な施設にしないという心構え/通常より一歩踏み込んだ構想を目指す決心が必要、
⑤早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論を、 ⑥拠点の検討と並行してすべきこと、 ⑦行政・メディア・市民・企業がそれぞれ「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ること

Q2. 拠点を考える上での大切な視点は？

[1] 東日本大震災はどのような経験だったのか？

- ①未曾有の経験、 ②想像を超える出来事・全てを理解し得ない、 ③人間社会のあり方を問われた、 ④原発事故

[2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？

問題提起		
(1) 仙台の特質とは何か？		
背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
①東北の拠点	①各施設・団体との連携 ②アーカイブの展開・連携 ③東日本大震災の全体像発信 ④信頼できる独立メディアの設立 ⑤広域な取組みと狭域な取組みの両立	①訪れた人が目的や時間に応じて周る ②信頼性の高い情報の発信 ③多様な情報・経験の発信 ④反復的な音による記憶の継承
②市民力のまち	①市民のアクションをつなぐ人材 ②多様な主体の参画	
③繰り返してきた災害の歴史	①災害文化の拠点	①災害文化を持つ都市として宣言
(2) 中心部の場所性とは何か？		
①震災当時の被災状況を感じられる現場ではないことを念頭において考える	①被災そのものを伝えることは沿岸部に ②沿岸部との協働	
②沿岸部のみならず全てが被災の現場		
③他施設との関係性や活用を考える		

Q3. 何のための拠点なのか？

何のために(目的) / 哲学(かくありたい)		
[1] 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①持続的な動き	①財源 ②人・組織 ③災害文化 ④親から子に継承する遊びの場 ⑤市民行事 ⑥時代に応じて変化し続ける場 ⑦身体的に響き合う場 ⑧多様な人が議論し続ける場 ⑨広場のように開かれた空間	①日常的に話題になる機会 ②災害をきっかけに生まれる行事 ③反復的な音による記憶の継承
②多様な経験/あらゆる人に受け入れられる物語/矛盾と複雑さを受け入れる	①伝えるメディアの扱い方 ②多様な経験の縦本と個々の経験へのアクセス ③複雑さを複雑なままに伝える独立したメディア ④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション ⑤語り合い・語り直し・語り継ぎの場	①居合わせた人同士が伝え合う ②写真を前に語り合う ③節目で語り合う
③東日本大震災が起きたことを忘れない	①伝える思いをつなぐ有形物	
[2] あらゆる危機を乗り越えるために		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①市民のアクションにつなげる仕組み	①市民のアクションをつなぐ人材	①市民全員が災害の経験を共通の言葉で伝える
②防災について学べる(研修や教育など)仕組み	①中心部は防災や災害対応に特化	
③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み	①モニュメントのような象徴的な存在を通じて想像を超える事があることを伝える ②震災を目の当たりしたことが想像の範囲を広げる経験でもあった ③時代に応じて変化し続ける場	①モニュメントを通じて親から子に伝える
④人間としての生きる力を高める仕組み	①災害文化としてこれからのアクションにつながることを学ぶ	
⑤人間社会のあり方を考える仕組み		
[3] 都市の未来のために		
①災害文化・アイデンティティを創造する仕組み	①災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点 ②今後の対策を考えるためのネットワークの拠点	①災害文化を持つ都市として宣言
[4] 伝承一般		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①現場・人・物のセット	①語り継ぐ術を学ぶ	①人から人に伝える
②アーカイブ	①多様な主体を巻き込んだアーカイブ ②方法論と極めて長く地道に取り組む覚悟が必要 ③アーカイブを通じた被災地の連携 ④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション(再掲)	
③多くの人が訪れる	①人が来るための身近な仕掛け ②子どもが周りで遊べるモニュメント ③複数の要素を戦略的に分けて考えること	①リピーターが訪れている ②市民が外から来た人を案内する ③日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に包まれる

Q4. 拠点の具体像や施設の要否をどう考えるのか？

- ①まず先に何をやる場なのか考える ②施設をつくるにしても運営する人を育てる視点が必要 ③メッセージ性を広げるもの、伝えるための場は必要
④施設だけではなく市民行事を実施するという考え方もある

◎ その他のキーワード

- ①路上 ②ユニークであること ③声、音、身体 ④海、水 ⑤間 ⑥広場

第4回検討委員会までの意見整理 <詳細版> (第4回で出た意見と重複する箇所を網掛けで示し、そのうち第4回の意見で新たに追加した箇所を下線で示す)

Q1. 検討の進め方はどうあるべきか？

①まず先に何をやる場なのか考える

- まずは誰が何をやるかを考えた上で、最終的に必要な施設があるとなれば何なのかという順番で議論を進めるべき
- 施設が必要か否か言う前に、何をやるのか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒にどんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ、生きた場所は作れない
- 施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要。それが無ければハードと運営がかみ合わず、市民を巻き込んだ活動につながらない
- 施設をつくと、施設の運営や維持が主になり、そこで何をすべきかということに労力が残らず、働く人の環境がその次になる。施設を先に考えるのではなく、何をすべきか、そこにどのような人が必要で、その人が何をやるのかを考え、そこに携わる人々と必要な場をつくっていくこと
- まずは、ハードではなく、内容からつくる必要がある。これからの議論では、どのような機能を持たせ、そこで何を語り、どうすれば敷居が低い開かれた場になるか、死やおそましかった状況を想像できるかなど、具体的な内容を、異なる立場の人が集まり、技術や工夫を出し合いながら、実現していくことが大切

②過去の事例に学ぶ

- 敬虔な雰囲気だけでは人は来ない
- 震災復興の面的なことを伝える施設が多く、個人のストーリーを扱う施設が少ない
- 写真のなかの風景は、全然知らない人にも訴える力がある。アウシュビッツ記念館のように遺影が並んでいる施設もあるが、今回のような津波や地震など自然が原因となった場合は、また違うアプローチがあるような気がする
- 広島平和記念資料館は今年展示更新を行った。いろんなことを伝えなければいけない中で、個々の被災したものに展示の肝を据えたようだ。館長や展示更新に携わった人から、そこにたどり着いた背景・知見を学んでも良いのではないか

③他の被災地に聞く

- 他の被災地から見て、仙台の拠点に何を求めるのか聞いてみるとよいのでは

④行政的な施設にしないという心構え/通常より一歩踏み込んだ構想を目指す決心が必要

- 予算、人員配置など、行政の仕組みの限界を超える取組みであり、行政施設にしないという心構えが必要
- 一人ひとりの苦しみに向き合うこと、創造までやっていくこと、若い世代を巻き込むこと、東北・世界を見据えることなどを、検討委員会・仙台市として決心し、通常よりも一歩踏み込んだ構想を目指すべき

⑤早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論を

- 拠点づくりにあたっては、通常のやり方を超える覚悟を持ち、早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論ができればいい

⑥拠点の検討と並行してすべきこと

- 震災の振り返りや、記録の発表・展示、記録の支援など、震災から10年や拠点づくりにつながることを意識的にやっていくべき
- 拠点ができる前に、既存の施設を活用しつつ、拠点で実現した活動を、行政や民間などの垣根を超えてスタートさせるべき
- 物ができる前に活動をスタートさせることが大事
- 10年という節目を意識しながら、進めていくことが必要

⑦行政・メディア・市民・企業がそれぞれ「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ること

- 仙台は市民協働、市民力のまちという系譜がある。脱スパイクタイヤ運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ることが出来れば、仙台市独自の力を持ったものが出来るのではないか
- 拠点づくり自体を市民参加で進めること
- 検討委員会として、市民参加イベント等に関われなかった人の声にも耳を傾けていく必要があるのではないか

Q2. 拠点を考える上での大切な視点は？

[1] 東日本大震災はどのような経験だったのか？

①未曾有の経験

- これだけ多くの方が犠牲になったという犠牲の重さ、暮らしや幸せが奪われたということ
- 8年経っても2533名の方々がいまだに見つかっていない

②想像を超える出来事・全てを理解し得ない

- 今回の震災は想像を超える出来事であり、理解できないことがある怖さが、この震災の本質。分かりやすく括ることで安心するかもしれないが、それは誤解に過ぎない
- 東日本大震災は人知を超えた巨大な出来事であり、全ては分かり得ない。その「分からなさ」をどのように引き受け、伝えて行けるかがすごく重要

③人間社会のあり方を問われた

- 津波により引き起こされた、今日の人間社会では成しえない次元の死が、人間社会の意味を考えさせられる契機となった
- 3.11は都市化により感じられなくなった「人間が自然の中にいる」ことを思い出させられた出来事であり、そのことを思い出せるような施設でありたい
- 忘れない事柄のなかには、震災そのもののことはもちろん、震災後の時間をどう生き、これからをどう生きていくかということも含まれるべき。震災後、デマや分断など、疑心暗鬼になってしまう出来事が起きた。災害の後で起こり得ることを学び、その後の社会や政治を考えられるような拠点であることも大切
- 震災は、社会が抱える無理やひずみが発露した経験。震災を考えることは、防災だけではなく、社会の問題に気づく大きなきっかけでもあった。震災を考えることは、どうしたら未来の社会を良くしていけるのかを考えることでもあり、そのような活動を継続していくためには覚悟が必要

④原発事故

- 原発事故の取扱い(当拠点での位置付け・比重)を考えたい
- 仙台の拠点性と全体性を考えると、原発も含めて東日本大震災の全体像を伝える必要はある(再掲)
- 福島原発事故は、東京の人が自らの党派性の中で主張することに利用された側面もあった。地元の人是对立する意見の狭間に置いていかれ、何を信じればいいのか分からなかった

[2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？

問題提起		
<p>(1) 仙台の特質とは何か？</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台ならではの機能も追及すべき 国・県・市が同じようなものを造っても無駄と批判されるだけであり、仙台市として拠点づくりを進めるためには、ステートメント（表明）が必要 		
背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>①東北の拠点</p> <ul style="list-style-type: none"> 東北の中での中心的な役割。長いスパンでの取組が必要。アーカイブ1つとっても、その体力をもってやれるのが仙台であるという心構え 東北唯一の政令市として、被災3県を視野に展開を 岩手県・宮城県・福島県、各県それぞれに復興祈念公園とそこに建物はあがるが、被災3県を横断的に取り扱う施設は無い 地の利、人口規模、予算などを考えると、東日本全体を見渡してメモリアルをつくれるのは仙台しかなく、仙台にはそれに応える責任がある 	<p>①各施設・団体との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台にまず来て、次の場所に行けるようにすることが大事な役割 施設同士をつなげると同時に、地域につなげる、地元・東北の文化も大事に マルチノード（様々な場所の接点）として様々な施設とつながり、訪れる人の出発点として、様々な場所のことを伝えられる施設 既にある被災地をつなぐネットワークを大切に連携ができると良いのではないかと <p>②アーカイブの展開・連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重したい。奪うのではなく、被災地連携の一つとして、アーカイブ研究やアーカイブの支援ができると良い 震災の記憶を目に見える記録として残していく、その大変な作業を東北の被災地のなかで唯一組織的・継続的にできるかもしれないのが、仙台。少なくとも挑戦する義務はある <p>③東日本大震災の全体像発信</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台の拠点性と全体性を考えると、原発も含めて東日本大震災の全体像を伝える必要はある（再掲） 震災の全体像として、どの項目・レベルまでをどのような手法で伝えるか検討が必要 仙台から各地へつなぐことも含め、全体像の発信を考えるためには、国や県の状況も知る必要がある 訪れる人の目線で見ると、ワンストップで多くの事を学び、知り、感じられるように、東北の玄関口である仙台市の中心部で全体像がしっかりと示す必要があり、他施設を考慮して扱う内容を減らす必要はないのではないかと 交通網から見て一番訪れやすい場所であり、ゲートウェイとして全体像を見られ、個別の色々なところにつなぐ役割はあると言えるかもしれない 仙台にも福島からの県外被災者を受け入れたという事実がある。仙台で起きたことの一つであり、福島のことを拠点に取り入れることは当然だと思う オール東北と考えれば原発も含まれる 地理的な位置づけと津波被災地も有する被災者であるという二重性の立場において、原発事故も含めた東日本大震災の全体像を日本はもとより国際的に提示していくべき <p>④信頼できる独立メディアの設立</p> <ul style="list-style-type: none"> 結局、福島の原発事故は、東京の人が自らの党派性の中で主張することに利用された。地元の人は対立する意見の狭間に置いていかれ、何を信じればいいのか分からなかった（再掲） 真実を伝えるためには、きれい事だけではなく、不都合な事も伝える必要があり、そのためには不偏不党の信頼が重要。信頼は災害が起きる前から育てなくてはいけない 信頼の醸成には、情報源など事前のネットワーク形成に向けて一歩一歩近づいていくことが必要であり、どのようにして実現していくかが重要。政治的・経済的な都合で押し流さずにそのようなことができるのは、体力のある仙台のようなところだけ 現実の情報を利害と関係無く公平に発信できるように、独立したメディアを立ち上げられないか 独立したメディアが信頼を得るためには、そこで働く人が本気で努力しないとイケない メディアから情報を受け取る人は、メディアが誰のお金で誰に向けて発信しているのか気にしている。独立したメディアが独立性を確保するためには、資金のあり方も考えなくてはならない ハードは小規模で良く、メディアの質を上げることに資金を投じるべき 独立したメディアとして、情報を素早く伝えられるラジオのようなものが作れば良いのではないかと 「ラジオ的なもの」とは小さく方向性が持たないメディアという比喩である一方、メディアとして成立させるには、一定の方向性を持って編集することも必要となる。全体像を示す責任とも矛盾することから、どう情報を扱うかも議論しなければならぬ 東日本大震災に特化した独立メディアを作ることを考えていくべきであり、編集で分かりやすくすることではなく、個人の被災レベルに沿った言葉を選び、複雑さを複雑なままに伝え、どのように信頼を得ていくのか考えるべき わかりやすくすれば支持は得られるが、複雑さをひきうけなければ信頼は得られない 複雑さをどの程度許容するかを考えるべきであり、訪れる人に複雑なことを複雑に提供すると丸投げ・役割放棄にもなりかねない 訪れる人に複雑さを丸投げしないためには、拠点が複雑さを受け入れ、分からなさや揺らぎ、ぶれをあきらめずに何度も問い掛ける姿勢とそこにいるスタッフが大事 <p>⑤広域な取組みと狭域な取組みの両立</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台らしいものと、仙台を超えるものをどう調整するか考えなくてはならない 個人・コミュニティ・まち・地域・中心部・沿岸部・宮城・隣県・東北・全世界など、様々なスケールにつながることを同時に考えなくてはならない 	<p>①訪れた人が目的や時間に応じて周る</p> <ul style="list-style-type: none"> 訪れた人が目的や時間に応じて、様々な施設を周る <p>②信頼性の高い情報の発信</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台市に独立したメディアがあれば、今後、何か起きた際に、人々がそこへ情報を求めたり、集まったりすることが考えられる <p>③多様な情報・経験の発信</p> <ul style="list-style-type: none"> 独立したラジオのようなものを作ることができれば、抽象度の高い音楽から、個人のオーラルヒストリーやアーカイブを活用した個別具体的な情報、全体像などを積極的に発信できる <p>④反復的な音による記憶の継承</p> <ul style="list-style-type: none"> メディアとして時間を扱うことになるので、例えば震災が起きた時間を毎日音で伝えることはできるのではないかと

背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>②市民力のまち</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民協働を進めてきた仙台市として市民がアクションを起こす場所を作る 仙台は市民協働、市民力のまちという系譜がある。脱スパイクタイヤ運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分かやった」と思えるようなプロセスを経ることが出来れば、仙台市独自の力を持ったものが出るのではないかと（再掲） 市民がいろいろなアクションを起こしてきたことが魅力的で、仙台にしかないユニークさの一つではあるが、その記録や現場に出会う術がなく、つなぎ手が不足している 	<p>①市民のアクションをつなぐ人材</p> <ul style="list-style-type: none"> 例えば地域課題解決に向かう際のつなぎ手として各地にあるフューチャーセンターのように、市民の力を防災やこの検討委員会で議論していることにつなげる人材が大事であり、それがキュレーションやユニークさにもつながる。早めに人材を育てていくことも必要 <p>②多様な主体の参画</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界を見据えるからこそ、市民が自らの地で起きた災害を振り返り、創造するなど、市民が参加できることが大事 部署間の縦割りを超え、さらに市民や県、専門家などの多様な人が垣根なく参加できるような場が必要 市民と一緒にプロセスを歩みながら、記録とアクションを創造していくことが大事 仙台市ほどにたくさんの震災のメモリアルに関する活動や団体がある場所はない。分散・自立したたくさんのものができており、これから必要なのは協調である。協調によって外向けには強いインパクトを発揮しつつ、内向きには市民が自身の体験だけではなく、様々な気付きや学びにつながる 多様な主体で協調し、様々な資源を生かしながら実施するためには、それらを理解し、それらをうまく組み合わせられる人が必要 時代が過ぎ社会が移ろうなかでも、その時代のなかで多くの人が意思疎通できる入口を探しながら、お互い歩み寄って作って行ける場 	
<p>③繰り返してきた災害の歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台には約30年に1度の頻度で地震が繰り返してきたという固有性がある 津波被害に焦点を当てすぎた伝承だと、利府長町断層による直下型地震が起きた時にカバーしきれない。将来起こり得る災害を見通して考えるべきだが、どこまでカバーすべきか 大地震と津波が400年単位で襲来していることを鑑みると、次の400年に向けて考えるくらいの歴史感覚を念頭に置けると良い。その間に利府長町断層型の地震も起こるかもしれない 	<p>①災害文化の拠点</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台では常識だと思われる独自の災害文化を目に見える形にする拠点（ミュージアムやそれ自体の活動拠点など） 仙台では「防災」のみの切り口だけでなく、「歴史・文化」、「日常生活」の重なりで伝えられるのではないかと 例えば川が破壊することに備えて内陸の家に船があるように、災害と共存している状況を災害文化と呼んでいるが、主に地方部にある文化。都市化により災害文化と逆行している仙台が、災害文化にチャレンジするというのは、とてもインパクトがある 災害文化というためには、災害で経験したプラスの面（我慢強さ、近所づきあいの復活、絆など）と復興が進むにつれて出てきたマイナスの面（堤防の高さ問題や騒音など、被害や観念の対立）の両方を伝えていくべき 災害自体は防げないが、被害や犠牲は減らせることから、災害文化として、これからのアクションにつながることを学べる場ではないか 災害文化を構成する要素は、「価値」、「規範」、「信念」、「知識」、「技術」、「工夫」、「伝承」であり、目に見えない技術に支えられていることも文化の中にも含まれる 過去の記憶が記録されるアーカイブ機能から、防災教育、新たな演劇・芸術活動などで、未来を志向し、災害文化を形づくっていく拠点 災害文化のメリットは、災害時の被害を最小化するだけでなく、都市としてのアイデンティティを構築し、災害をきっかけとしたビジネスや政策立案に関わる人や情報が集まるなど、仙台の未来をつくることにもつながる 悲慘さを伝えるだけの被災地ツアーだけでなく、現地の人々を巻き込んで、来訪者を各地に案内し、そこにあった人々の営みを伝えられるような活動も必要 	<p>①災害文化を持つ都市として宣言</p> <ul style="list-style-type: none"> 広島市や長崎市のように、一つの自治体であっても、自分たちはこのような自治体だということを宣言している。防災環境都市仙台とずっと謳い続けるならば、仙台は防災文化ではなく災害文化を持っている都市を作っていくという方向性を市民と共有できないかと思う。 災害文化を持つ都市と宣言するならば、水やヘルメットの備蓄のような単純な防災対応だけではなく、災害時の情報共有のされ方やその信頼性が揺らぐことへの不安など、想定外を乗り越えてきたからこそ言えることも扱うことが大事。
<p>(2) 中心部の場所性とは何か？</p> <ul style="list-style-type: none"> 沿岸部と市街地を両方持つことが仙台市のユニークなところ。「中心部は現場ではなく、完全に発言に徹する場所」と捉えるか、「中心部も被災の現場であり、沿岸を支える現場でもある」と捉えるか、市中心部の立ち位置には2つの考え方があ 		
<p>①震災当時の被災状況を感じられる現場ではないことを念頭において考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 距離の遠さを理由に沿岸部施設に行かない市民に対して訴求できる可能性があるが、人が来てくれない可能性もある 	<p>①被災そのものを伝えることは沿岸部に</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないかと 仙台市の沿岸部では、自然の変化や、地域で活動している人たちの変化など、いろいろな変化がある。その現場の力を持っていくことはできない 海は世界ともつながっている。街なかに箱物をイメージするのではなく、海あるいは真山堀、沿岸部をどう生かしていくかが大切。海をきちんと引き受けようと思ったら、中心市街地に限らず、立地についてもいろいろ検討する余地があるのではないかと <p>②沿岸部との協働</p> <ul style="list-style-type: none"> 沿岸部の現場や人とのつながりが軸ではないか 中心部の拠点では、沿岸部の人たちとのつながりをとにかく協働で運営するような形式。一緒に意識を共有し、働くというような感覚が得られるような工夫と仕組みと情熱を傾けるということが大前提として必要 現場がキーポイント。現地、地元の人を優先しないといけない 	
<p>②沿岸部のみならず全てが被災の現場</p> <ul style="list-style-type: none"> どこまでが被災地かという線引きをしがちだが、グラデーションはありつつも沿岸部のみならず、丘陵部を含め全てが被災地であるという認識をしておくべき 地理的なハブの役割を果たすと同時に、津波被災地も有するという二重性を生かせると良い 中心部で被災地ではないという視点だけだと上から目線になる。自身も被災地であるという姿勢を前面に出していくべき 被災の中心地ではないという姿勢は、被災の深刻さを他者に押し付け、そこ距離を置き、上から目線で見ることにつながり兼ねず、倫理的に良くない ある意味で全てが被災現場であったので、「現場」とくくりにすぎるとしゃべれなくなる人もいるので、注意が必要 		
<p>③他施設との関係性や活用を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 求められる機能によっては施設規模・立地に影響する。現在市内で検討中の施設等との関係性も含めて検討すべき 既存施設を活用する可能性もある。特にメディアテークの役割が大きい 中心部、沿岸部、震災遺構のそれぞれの拠点性を明確にして伝えていくことが重要 		

Q3. 何のための拠点なのか？

何のために (目的) / 哲学 (かくありたい)		
<p>[1] 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために</p> <ul style="list-style-type: none"> 犠牲と混乱を繰り返さないため、犠牲を無駄にしないために 同じことを繰り返さないとか、守れる命を守るということがこの拠点で継続的に発信すべきメッセージであり、そこが根っこにあるべき 世代間論理：世代を超えて災害の経験がバトンタッチされていくような場 		
何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>① 持続的な動き</p> <ul style="list-style-type: none"> 過去を記録するだけでなく現在とのつながりをもたせることが必要 災害を乗り越える準備も常に移り変わる。作って終わりではなく、常に更新し続けられるものが求められる (再掲) 東北の中での中心的な役割、長いスパンでの取組が必要。アーカイブ1つとっても、その体力をもってやれるのが仙台であるという心構え (再掲) 人の死によって気づかされたことを無駄にせず、今の現実をもっとよく見たり向き合うための場であるべき。そうでなければ、未来に対しても過去に対してもアクティブではない 今回の災害が過去の事象になったとしても、その時代に生きる人と響き合いながら伝えていられると良い 何かをつくって一丁あがりにはせず、持続的な活動の場に 過去の遡ること、未来に向けたこと、今の活動をどうつなぐかなど、様々な取組みがあるなかで、これさえあれば良いという決定的な取組みができることは無い。あきらめることなく、柔軟にしつとくやり続けていくことが大切 中心部にあるからこそ、時間がかかることとか、難儀なこと、厄介なことに取り組んでいくことが必要。例えば、震災後の民主主義などを考え、たくましく歩む力をつけるような対話の場など 50年、100年、400年と続けられる視点をに入れていくべき 	<p>① 財源</p> <ul style="list-style-type: none"> 100年先を見通した安定財源を確保する 仙台市で全ての予算を賄うと、行政に不都合なことが出てきにくくなる。様々な主体が関わりお金を出し合うことが望ましい 財源も含めて独立性を保たなければ信頼を得ることはできない <p>② 人・組織</p> <ul style="list-style-type: none"> 編集部のようなものを構え、被災の体験を何十年、何百年にわたって聴き続けるようなアクションにつなげられるといい 訪れる人に複雑さを丸投げしないためには、拠点が複雑さを受け入れ、分からなさや揺らぎ、ぶれをあきらめずに何度も問い掛ける姿勢とそこにいるスタッフが大事 (再掲) どのような準備、作業、人材が必要なのか、技術的な問題も含めて、アーカイブを作るための検討を早めに始めるべき 例えば地域課題解決に向かう際のつなぎ手として各地にあるフューチャーセンターのように、市民の力を防災やこの検討委員会で議論していることにつなげる人材が大事であり、それがキュレーションやユニークさにもつながる。早めに人材を育てていくことも必要 (再掲) 多様な主体で協働し、様々な資源を生かしながら実施するためには、それらを理解し、それらをうまく組み合わせられる人が必要 (再掲) 施設が必要か否か言う前に、何をするのか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒にどんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ、生きた場所は作れない (再掲) 施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要。それが無ければハードと運営がかみ合わず、市民を巻き込んだ活動につながらない (再掲) 施設をつくると、施設の運営や維持が主になり、そこで何をすべきかということに労力が残らず、働く人の環境がその次になる。施設を先に考えるのではなく、何をすべきか、そこにどのような人が必要で、その人が何をするのかを考え、そこに携わる人々と必要な場をつくっていくこと (再掲) まずは、ハードではなく、内容からつくる必要がある。これからの議論では、どのような機能を持たせ、そこで何を語り、どうすれば敷居が低い開かれた場になるか、死やおそましかった状況を想像できるかなど、具体的な内容を、異なる立場の人が集まり、技術や工夫を出し合いながら、実現していくことが大切 (再掲) 頭が大きくて動きにくくならないように、機動性や適応力を持った運営体制を考えるべき 持続的に意見を集めたり、深めたり、貯めたり、手を加えたり、広げたりするなど、あきらめることなく、柔軟にしつとくやり続けていくためには、人の力が重要 人が一番活動しやすい環境として、また、市民や各機関をはじめ社会全体がアクセスする受け皿として、組織が必要 拠点で働く人には、最低限の衣食住が揃い、仕事に専念できるだけの十分な環境が必要 これまでの議論をかなえるのは現場で働く人であり、その人にちゃんと投資をすることが必要。そうしなければすべてが瓦解しかねない 震災について、人は学びたいという気持ちの前に、知らないから知りたいもしくは思い出したいという衝動が先にあると思う。震災に関する情報を広く見ることができ変化し続けるような場と、そこにいる人の集団がセットとなり、人の衝動にアプローチすることが不可欠 市政の中で独立性を保ち、年度ごとに替わるのではなく、継続的に学び・育ち、語り継ぐ役割を担う人の集団 震災には様々な捉え方や時間が経つことで変化していくことがあり、また、新たな災害が生まれるなど、いろいろなことが変わっていくはすのものであり、そこに向き合い続けるには、大変な労力と、それを社会全体で支えていくという覚悟が必要 震災は、社会が抱える無理やひずみが噴き出した経験。震災を考えることは、防災だけではなく、社会の問題に気づく大きなきっかけでもあった。震災を考えることは、どうしたら未来の社会を良くしていけるのかを考えることでもあり、そのような活動を継続していくためには覚悟が必要 (再掲) 人間中心の運営をしていると胸を張って言えるような施設にしよう 拠点で働く人は、毎年替わるのではなくずっとつながっていて、その中で育てていくことが必要 <p>③ 災害文化</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台では常識だと思われている独自の災害文化を目に見える形にする拠点 (ミュージアムやそれ自体の活動拠点など) (再掲) 東日本大震災は非常に大きな悲慘さと不安を皆で同時に体験した出来事。災害文化として、災害で受けた悲慘さや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか 仙台では「防災」のみの切り口だけでなく、「歴史・文化」、「日常生活」の重なりで伝えられるのではないか (再掲) 例えば川が破壊することに備えて内陸の家に船があるように、災害と共存している状況を災害文化と呼んでいるが、主に地方部にある文化。都市化により災害文化と逆行している仙台が、災害文化にチャレンジするというのは、とてもインパクトがある (再掲) 災害文化というためには、災害で経験したプラスの面 (我慢強さ、近所づきあいの復活、絆など) と復興が進むにつれて出てきたマイナスの面 (堤防の高さ問題や訴訟など、利害や観念の対立) の両方を伝えていくべき (再掲) 災害自体は防げないが、被害や犠牲は減らせることから、災害文化として、これからのアクションにつながることを学べる場ではないか (再掲) 災害文化を構成する要素は、「価値」、「規範」、「信念」、「知識」、「技術」、「工夫」、「伝承」であり、目に見えない技術に支えられていることも文化の中にも含まれる 災害文化のメリットは、災害時の被害を最小化するだけでなく、都市としてのアイデンティティを構築し、災害をきっかけとしたビジネスや政策立案に関わる人や情報が集まるなど、仙台の未来をつくることにもつながる (再掲) 悲慘さを伝えるだけの被災地ツアーだけではなく、現地の人々を巻き込んで、来訪者を各地に案内し、そこにあった人々の営みを伝えられるような活動も必要 (再掲) <p>④ 親から子に継承する遊びの場</p> <ul style="list-style-type: none"> 追悼のシンボルとしてモニュメントが必要であり、周りでは子どもが遊びつつ、モニュメントの由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するような二重の機能が重要 <p>⑤ 市民行事</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設だけでなく市民行事にすることが大事。住んでいるまちの小学校が集まる音楽祭のようなイベントのように、全部の小学校が関わり思い出に残るような行事を大事にしたい 	<p>① 日常的に話題になる機会</p> <ul style="list-style-type: none"> 小さい頃の記憶が長く続く双子のように、語り合うことで記憶が長く続いている状況があると良い <p>② 災害をきっかけに生まれる行事</p> <ul style="list-style-type: none"> 長崎には江戸時代の土砂災害をきっかけに、月に1回饅頭を配る「念仏講饅頭配り」という行事がある。100年以上続き、1980年代の豪雨の際はその集落では死者が1名も出なかった。このように100年以上先に結果を残すような行事が作れると良い 歌のように市民全員が共通で出来ることがある <p>③ 反復的な音による記憶の継承</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎日、地震が起きた時間に鐘を鳴らすことで、過去の記憶を日常化させる

何をしたい（要素）	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>①持続的な動き</p>	<p>⑥時代に応じて変化し続ける場</p> <ul style="list-style-type: none"> 変化し続け、身体的に響き合うためには、たくさんの工夫と技術が必要。その場とは例えば、壁がなく屋根があり鐘が鳴り響くような広場や、次に災害が起きたときに限りなく正しい情報が廻るような場所。 震災について、人は学びたいという気持ちの前に、知らないから知りたいもしくは思い出したいという衝動が先にあると思う。震災に関する情報を広く見ることができ変化し続けるような場と、そこにいる人の集団がセットとなり、人の衝動にアプローチすることが不可欠（再掲） <p>⑦身体的に響き合う場</p> <ul style="list-style-type: none"> ハードではなく、体に訴えかける音などで過去の記憶を日常化させ、現在そして未来に重ねる仕組みが良い 変化し続け、身体的に響き合うためには、たくさんの工夫と技術が必要。その場とは例えば、壁がなく屋根があり鐘が鳴り響くような広場や、次に災害が起きたときに限りなく正しい情報が廻るような場所。（再掲） 震災について、人は学びたいという気持ちの前に、知らないから知りたいもしくは思い出したいという衝動が先にあると思う。震災に関する情報を広く見ることができ変化し続けるような場と、そこにいる人の集団がセットとなり、人の衝動にアプローチすることが不可欠（再掲） 震災の記憶が今後の社会に対してどういう意味を持つのかということは、自分の体一つで語り継ぐことであり、まずは体を資本に考えるべき。拠点の機能や工夫についても、体から離れずに考えていければ、予算に見合うやり方ができるはず 海がキーワードではないか。海は東北、東日本大震災全体につながる。海という自然が教えてくれるものというのは頭で考え、他人に何かを教える以前に、多様な人々が様々な感じ方で学び起こすことができる可能性がある。学ばなくとも海に触れ感じるだけでも良い 海は水でできていて、その水というのが自分たちの体に入って命になるし、いろんなことに変化し得るというメタファー（比喩、隠喩）だと考えたときに、それはきっと人の声のようなものとも言える 海について、物理的に近づくだけでなく高いところから見下ろした海も、震災とのつながりを感じる。これだけ広い海が私たちの周りにあり、自分の視界では見渡せないくらいの範囲で津波を起こした。そういう海との接点もあり得る <p>⑧多様な人が議論し続ける場</p> <ul style="list-style-type: none"> 8月3日のワークショップのように、いろいろな人が集まって議論し続ける場所 立場を超えて意見を出し合い、提言をまとめあげられるような場であって欲しい <p>⑨広場のように開かれた空間</p> <ul style="list-style-type: none"> 建物というよりはギリシャ時代のアゴラ（広場）のような場で、学び合い、伝え合う活動の空間が必要 	
<p>②多様な経験／あらゆる人に受け入れられる物語／矛盾と複雑さを受け入れる</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災のレベルが個人であまりにも違う状況がある 被災の状況に応じ、時間が経ってからも語れるように、市民に開かれていることが必要 多様な物語が交錯する場、物語を紡ぎなおす場に 追体験できることやリアリティを突き詰めると、被災者の方が入れない施設になりかねない。被災した当事者にも開かれた施設に 死が人の感情に与える影響は大きく、震災経験者でなくとも、身近な人の死に向き合ったことがある人は、追体験できる可能性がある 自身は抽象度を上げ、行方不明の方も、動物や微生物で解体され、食物連鎖でつながり、この世で生きているのだという気持ちがある いろいろな形で語り整理をつけることで、完全な忘却ではなく、忘却のバランスが大切 震災であらゆるものの価値が一度フラットになり、その後の復興に伴う経済活動の中で、自分が誰だかわからなくなり、自分の物語を失うような状況があった モニュメントなどは、価値観を変えられた破壊や人の死などから発せられた沢山の物語が背景にあり、人々に愛されるものであるべき 例えば土砂崩れによる被災者など「他にもっと大変な人がいる中で声高に言っただけはいいない」という気持ちを持つ方もおり、ストーリーが隠れやすくなっている。そのようなミクロの部分も表現することが大事 いろんなことが混沌とし、線引きできない事や矛盾があるのか当たり前である中で、矛盾を大切にし、引き受ける場所になればよい 実感を通じてストーリーに落とし込み、自分事化することで、自らアクションを起こさせる場であり、個々の意見を集めながら、ハブとして発信できるかが大事 災害は住んでいる場所やタイミングによって起こる事象が異なる。多様な事象、体験のことを知らなければ、本当に災害に強くなることはできない。それらを学べる状況をつくるためにも内陸部と沿岸部がつながる必要がある 	<p>①伝えるメディアの扱い方</p> <ul style="list-style-type: none"> 実体験を伴わずに被災映像をテレビなどの媒体で見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」とどう向き合うかは課題 被災された人は、悲惨なものを見たくない反面、自身の物語とのつながりを求めていることもあると思う。時間が経てば、その関係性は変わっていく 実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」が今の社会の複雑な問題につながっているような気がするが、自身は震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった 現像した写真や手書きの文字に縁遠い世代に共感し得るかは分からないが、写真洗浄が行われた無数の写真、選機所などの張り紙などが呼びかける力はとても大きかった 海の中には自分たちが見えない闇のようなものがある。声に出せず、記録にも残らない闇の部分が震災にもある。生と死の循環にある闇を、拠点の中でどう持つかということも忘れないでおく必要がある <p>②多様な経験の総体と個々の経験へのアクセス</p> <ul style="list-style-type: none"> 全ての経験を詳細に見なくとも、それらの総体が感じられ、それから個々の経験にアクセスできることが必要 例えば震災の夜の満点の星空のように、多様な経験の総体として神秘的な美しさを持ったものが表現できれば、怖くても人は近づけるかもしれない 全体を見渡すイメージとして、大きな雲の中に紐でつながった星が点々とあり、見る人がそれに触れることで紐づけられた情報が伝わってくるような仕組みができればよい。そうすれば個別の情報に触れつつ、それが全体のごく一部分であると感じることにつながるのではないか <p>③複雑さを複雑なままに伝える独立したメディア</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災に特化した独立メディアを作ることを考えていくべきであり、編集で分かりやすくするというのではなく、個人の被災レベルに沿った言葉を選び、複雑さを複雑なままに伝え、どのように信頼を得ていくのか考えるべき（再掲） わかりやすくすれば支持は得られるが、複雑さをひきうけなければ信頼は得られない（再掲） 財源も含めて独立性を保たなければ信頼を得ることはできない（再掲） <p>④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な個人・団体の記録がアーカイブされ、見ることができ、かつ、負の側面、被災の現実、出来なかったことなどを伝えていければ、複雑性をそぎ落とさないところになるのではないか 複雑さをどの程度許容するかを考えるべきであり、訪れる人に複雑なことを複雑に提供すると丸投げ・役割放棄にもなりかねない（再掲） 訪れる人に複雑さを丸投げしないためには、拠点が複雑さを受け入れ、分からなさや揺らぎ、ぶれをあきらめずに何度も問い掛ける姿勢とそこにいるスタッフが大事（再掲） 過去のことを記録するためというよりも、独立した状態を保ち続け、未来における信頼の土台として、個々の記録や情報を不偏不党に集めたアーカイブが必要 どのような準備、作業、人材が必要なのか、技術的な問題も含めて、アーカイブを作るための検討を早めに始めるべき（再掲） 中心部施設のアーカイブは、複雑さを保つ目玉。能動的に取り出せる人には提供できるようにし、そうでない人には時代に応じたキュレーションなどで見せていく 展示で見える1場面の先には複雑なことがあり、全体像は理解しえないが、理解しえないことがあること自体を理解してもらいつつ、特定の事象については十分に理解してもらうような建てつけも可能ではないか 人それぞれの視点と経験によってたくさんの真実があり、扱う情報に線引きし、整理しすぎると見誤る恐れがある。同じ展示を続けるのではなく、時代や期間に応じて思い切ったキュレーションを試みるのが良いのではないか 東日本大震災の全体を単純なストーリーでまとめる事は誰にも出来ない。揺らぎを引き受け、現在進行形で作り直しながら行くという心構えをもった施設であるべき 市民図書館の震災文庫を見たが、記録の量が膨大であり、その人に応じてキュレーションができるような案内人が必要 <p>⑤語り合い・語り直し・語り継ぎの場</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者と記憶を共有する「語り合い」や、他者の話を聞くことで自身の体験を見つめ直す「語り直し」、次の世代に継いでいく「語り継ぎ」が拠点の重要な役割 記憶を語り合い、震災の経験が多様であることを繰り返し実感する場所 参加者が語り、自分で声を残し、加工するなどDIYできるような場 言葉に出し、対話しながら個々の体験を共通の経験に高めていく場 	<p>①居合わせた人同士が伝え合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災経験者が自身の経験を新市民に話すなど、その場に居合わせた人同士で経験を伝え合う <p>②写真を前に語り合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 生きている人も死んでいる人も等しく並び写真洗浄の場が、悲惨な現実にあらうような場であり、確かな場所を求める思いに写真の役割が果たされていた 見る人・来る人によって記憶が紐解かれ、新たなものになっていく場であってほしい <p>③節目で語り合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 10年目・20年目という節目で語り合う
<p>③東日本大震災が起きたことを忘れない</p> <ul style="list-style-type: none"> 一番基本的な拠点の軸は、東日本大震災が起きたことを忘れないこと 	<p>①伝える思いをつなぐ有形物</p> <ul style="list-style-type: none"> 時が流れ、震災を経験していない人ばかりの社会になり、思いの強い人が少なくなると、伝える活動の予算が必要ないと思われかねない。伝え続けるため、伝えていく人たちのつながりを残すために、石碑など何か形あるものが必要 	

[2]あらゆる危機を乗り越えるために		
<ul style="list-style-type: none"> ・災害を乗り越える準備も常に移り変わる。作って終わりではなく、常に更新し続けられるものが求められる ・これから起こり得る災害、想定外があること、それにどう向き合っていくか考えることも重要な視点 		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①市民のアクションにつなげる仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・建物だけでなく、人の育成や研究など、市民にアクションを起こしてもらえらる仕組みを考えていく場が必要 ・災害の悲惨さを伝えて終わるのではなく、個人の実践につなげる工夫が必要 ・市民協働を進めてきた仙台市として市民がアクションを起こす場所を作る(再掲) ・<u>災害自体は防げないが、被害や犠牲は減らせることから、災害文化として、これからのアクションにつながることを学べる場ではないか(再掲)</u> ・<u>実感を通じてストーリーに落とし込み、自分事化することで、自らアクションを起こさせる場であり、個々の意見を集めながら、ハブとして発信できるかが大事(再掲)</u> 	①市民のアクションをつなぐ人材 <ul style="list-style-type: none"> ・例えば地域課題解決に向かう際のつなぎ手として各地にあるフューチャーセンターのように、市民の力を防災やこの検討委員会で議論していることにつながる人材が大事であり、それがキュレーションやユニークさにもつながる。早めに人材を育てていくことも必要(再掲) 	①市民全員が災害の経験を共通の言葉で伝える <ul style="list-style-type: none"> ・災害体験の多様さはあるが、「仙台で起きたこと・伝えたいことは〇〇です」と市民全員がシンプルに伝えるようにする
②防災について学べる(研修や教育など)仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・子どもから大人まで防災教育の機能もあった方がよい ・防災を勉強できる施設はあった方がよい ・<u>これからも様々な災害がある中で、研修や教育などの機能を持つ拠点が必要</u> 	①中心部は防災や災害対応に特化 <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないか(再掲) 	
③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・震災を中心に捉えながらも、震災にとどまらず様々な部門をつなぐハブに ・これから起こり得る災害、想定外があること、それにどう向き合っていくか考えることも重要な視点(再掲) ・特定の災害を覚えておく施設というよりも、災害とともに生きるには何が必要かを発信する ・東日本大震災と仙台だけではなく、国内や海外の災害、過去とこれからのつながりを考える必要がある。そのことは仙台市での震災の教訓を客観視し再認識する機会ともなる ・東日本大震災は人知を超えた巨大な出来事であり、全ては分かり得ない。その「分からなさ」をどのように引き受け、伝えて行けるかがすごく重要 	①モニュメントのような象徴的な存在を通じて想像を超える事があることを伝える <ul style="list-style-type: none"> ・理解できないことがある怖さとは、とても抽象的なこと。モニュメントのような象徴的な存在を通じて伝えられるような作りがあっても良い ②震災を目の当たりにしたことが想像の範囲を広げる経験でもあった <ul style="list-style-type: none"> ・<u>実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」が今の社会の複雑な問題につながっているような気がするが、自身は震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった。(再掲)</u> 	①モニュメントを通じて親から子に伝える <ul style="list-style-type: none"> ・釜神様のようにモニュメントの存在を子が親に尋ねることで、親から子にその由来を伝える
④人間としての生きる力を高める仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・人間として生きる力を高められるところ ・災害で心にダメージを受けた方が、気持ちを回復させていくという意味でも、施設なのかプログラムを通じて、生きる力を得られる場所だと良い ・最近の研究で、この震災を上手く乗り越えるためには、災害特有の能力ではなく、リーダーシップや愛他性など人間そのものの能力が影響していることが分かった。人の想定を超えるものが災害ならば、ハードでは対応できず、人間が持つ能力で対応しなければならず、中心部拠点とは市民がそのような人間の能力を身に付けられるところではないか 	①災害文化としてこれからのアクションにつながることを学ぶ <ul style="list-style-type: none"> ・<u>災害自体は防げないが、被害や犠牲は減らせることから、災害文化として、これからのアクションにつながることを学べる場ではないか(再掲)</u> 	
⑤人間社会のあり方を考える仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・自然と人間の関係・自分の暮らしのあり方を見つめ直すような場 ・津波により引き起こされた、今日の人間社会では成しえない次元の死が、人間社会の意味を考えさせられる契機となった(再掲) ・3.11は都市化により感じられなくなった「人間が自然の中にいる」ことを思い出させられた出来事であり、そのことを思い出せるような施設でありたい(再掲) ・震災当時、津波の後の星空や海について美しいという言葉が異口同音に聞かれたが、それは人の死に直面することで、人間が本能的に持つ自然が、外の自然とシンクロしたから ・打ち勝てないような不安を押し付けられた震災の経験は、震災に限らず、不安に向き合いながらも如何に日常を生きるかという人間の根本的なテーマにつながる ・「(自然現象による)災害には勝てない」から、いざという時には助け合うしかないという構えが必要ではないか ・自然と人間との関係から、災害が災害でない時もある。地球に住んでいるからには自然現象と付き合わなければならず、それを乗り越えることが大事 ・自然や歴史の中で、自分の立ち位置を実感できる場。頭で学ぶよりも実感できる場 ・<u>忘れない事柄のなかには、震災そのもののことはもちろん、震災後の時間をどう生き、これからどう生きていくかということも含まれるべき。震災後、デマや分断など、疑心暗鬼になってしまう出来事が起きた。災害の後で起こり得ることを学び、その後の社会や政治を考えられるような拠点であることも大切(再掲)</u> ・<u>震災は、社会が抱える無理やひずみか噴き出した経験。震災を考えることは、防災だけではなく、社会の問題に気づく大きなきっかけでもあった。震災を考えることは、どうしたら未来の社会を良くしていけるのかを考えることでもあり、そのような活動を継続していくためには覚悟が必要(再掲)</u> 		

【3】都市の未来のために		
<ul style="list-style-type: none"> 震災だけの視点ではなく、時代的役割、街のランドデザインの中での役割を踏まえた検討が必要 過去を忘れずにおくことが未来に何をもたらすのか 仙台でやるからには仙台市民に恩恵が無くてはいけない コストを出すだけではなく、仙台に対する見返りの視点も組み込まなくてはならない 震災の経験を社会に生かしたり、NGOを活発化するなど、防災だけではなく、総合的に社会のための施設をつくる 		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①災害文化・アイデンティティを創造する仕組み <ul style="list-style-type: none"> 災害の経験を仙台市のアイデンティティとして捉え、災害文化を創り広げていくためのセンター 例えば川が氾濫することに備えて内陸の家に船があるように、災害と共存している状況を災害文化と呼んでいるが、主に地方部にある文化。都市化により災害文化と逆行している仙台が、災害文化にチャレンジするというのは、とてもインパクトがある(再掲) 過去の記憶が記録されるアーカイブ機能から、防災教育、新たな演劇・芸術活動などで、未来を志向し、災害文化を形づくっていく拠点(再掲) 災害文化のメリットは、災害時の被害を最小化するだけでなく、都市としてのアイデンティティを構築し、災害をきっかけとしたビジネスや政策立案に関わる人や情報が集まるなど、仙台の未来をつくることにもつながる(再掲) 	①災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点 <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災は非常に大きな悲しみと不安を皆で同時に体験した出来事。災害文化として、災害で受けた悲しみや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか(再掲) 災害文化というためには、災害で経験したプラスの面(我慢強さ、近所づきあいの復活、絆など)と復興が進むにつれて出てきたマイナスの面(堤防の高さ問題や騒音など、利害や観念の対立)の両方を伝えていくべき(再掲) ②今後の対策を考えるためのネットワークの拠点 <ul style="list-style-type: none"> 災害時のための企業などとのサポートシステムが平時から組み上げられていれば「共助」につながり、災害対応力が増す。そのような今後に対する対策を考えるためのネットワークの核となる施設であるといい 	①災害文化を持つ都市として宣言 <ul style="list-style-type: none"> 広島市や長崎市のように、一つの自治体であっても、自分たちはこのような自治体だということを宣言している。防災環境都市仙台とずっと謳い続けるならば、仙台は防災文化ではなく災害文化を持っている都市を作っていくという方向性を市民と共有できないかと思う(再掲) 災害文化を持つ都市と宣言するならば、水やヘルメットの備蓄のような単純な防災対応だけではなく、災害時の情報共有のされ方やその信頼性が揺らぐことへの不安など、想定外を乗り切ってきたからこそ言えることも扱うことが大事(再掲)
【4】伝承一般		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①現場・人・物のセット <ul style="list-style-type: none"> 被災現場、施設、人がセットであることが効果的 現場の持つ力にはかなわない。震災を学ぶには現場とセットであることが大事 伝えるためには場所、人、物の3つを揃える必要があり、仙台市全体としてその機能をどう備えるか 	①語り継ぐ術を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> 語り継ぐようなソフトの技術を学べる必要がある 	①人から人に伝える <ul style="list-style-type: none"> 人から人に伝える
②アーカイブ <ul style="list-style-type: none"> 記録を集めても活用されていない課題がある アーカイブについて、何を記録し、何を残すべきかという改めての議論が必要 アーカイブの質と量を検討する必要がある 	①多様な主体を巻き込んだアーカイブ <ul style="list-style-type: none"> メディアテークで行っているような個人の記録活動の支援を、組織やコミュニティ、企業にまで広げてはどうか 参加者が語り、自分で声を残し、加工するなどDIYできるような場(再掲) ②方法論と極めて長く地道に取り組む覚悟が必要 <ul style="list-style-type: none"> それぞれの記憶を語り合い、それを目に見える形で残していくことはとても大事だが、実際にやるとなると、とても大変な作業。方法論を良く考え、技術とノウハウを持っている人たちを集めてやっていくことが大事 アーカイブは1・2年後に成果を判断するのではなく、100年後・200年後に向けてやるという覚悟が必要。本当に地道で、気の長い作業 ③アーカイブを通じた被災地の連携 <ul style="list-style-type: none"> 他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重したい。奪うのではなく、被災地連携の一つとして、アーカイブ研究やアーカイブの支援ができるといい。(再掲) アーカイブ機能は、すでに進んでいるプロジェクトと調整しながら、重複しないように ④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション(再掲)	
③多くの人が訪れる <ul style="list-style-type: none"> ストック(箱)ではなく、フロー(人の流れ)を作り出す施設 拠点の対象者をどこにおくか。市外の人だけではなく、市民にも訪れてほしい 広島の平和記念公園・資料館などは国内外から人が訪れつつ、市民の参画もある。そのような両立できることを目指したい 人と防災未来センターの事例を鑑みると、中心部は市外から求心力を持つ一方、地元の人や客体化する危険性をはらむ 	①人が来るための身近な仕掛け <ul style="list-style-type: none"> 人々から縁遠い施設になると願う結果は得られない。あえて下世話感・エンタメ感も必要 施設が開かれているためにはお茶飲み、おいしいコーヒーなど食に関する必要がある 例えば食事できる場所やショップ等の市などが周りにあり、子供が遊び大人も同時に楽しめるような場をつくらせりピーターを増やす 入場料引のように、市民が何回も来場しやすい仕組み 経験や教訓を学ばせたい人はいるが、それを自主的に学びたい人はどれほどいるのか。手軽さや身近さなどを体現し、誰でも気軽にいつでも繰り返し来ることができるように敷居を低くすること 気軽に立ち寄れるところ 軽さが表に立ちすぎることには違和感がある。体験者が少なくなると放っておいても軽くなる。入り口は軽いけれども、入っていったらしっかりと重い部分まで伝えられるようにしてほしい 震災のことを学びたい人がいるのかではなく、学びたい人をつくり、学ばなきゃいけないという社会に変えるぐらいの意気込みで拠点をつくってほしい ②子どもが周りで遊べるモニュメント <ul style="list-style-type: none"> 追悼のシンボルとしてモニュメントが必要であり、周りでは子どもが遊びつつ、モニュメントの由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するような二重の機能が必要。(再掲) ③複数の要素を戦略的に分けて考えること <ul style="list-style-type: none"> 象徴的な存在とフローの仕掛け、アーカイブ等の記録を一括りにしてしまわず、戦略的に分けて考えることも必要 	①リピーターが訪れている <ul style="list-style-type: none"> 絶えずリピーターが訪れている ②市民が外から来た人を案内する <ul style="list-style-type: none"> 仙台市民が外国や他県の人を案内したくなる ③日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に包まれる <ul style="list-style-type: none"> 普段は日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に作り込むという方法もある

Q4. 拠点の具体像や施設の要否をどう考えるのか？

①まず先に何をやる場なのか考える

- 施設が必要か否か言う前に、何をやるのか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒にどんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ、生きた場所は作れない(再掲)

②施設をつくるにしても運営する人を育てる視点が重要

- 施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要。それか無ければハードと運営がかみ合わず、市民を巻き込んだ活動につながらない(再掲)

③メッセージ性を広げるもの、伝えるための場は必要

- 災害を考えるだけの場所ではなく、アーカイブのように機能的なものを備えつつ、メッセージ性を広げるモニュメントのようなものはあった方がよい
- ①記憶を次の世代に渡していくアーカイブや展示ができる建物、②多くの犠牲性に対する追悼の拠り所となるモニュメント、③子どもたちへの防災教育や災害文化を形成する拠点となるイベント会場や広場。過去(記憶)から現在(追悼)、未来(発信)を考えるとこの3つの機能は必要
- まだまだ伝え切れていないことがあり、伝える場も不十分。よって拠点は必要

④施設だけではなく市民行事を実施するという考えもある

- 施設だけでなく市民行事にすることが大事。住んでいるまちの小学校が集まる音楽祭のようなイベントのように、全部の小学校が関わり思い出に残るような行事を大事にしたい(再掲)

◎ その他のキーワード

①路上

- 震災時の様々なシーンの舞台は「路上」だった

②ユニークであること

- 他に例が無い取組みで、海外からユニークで魅力があると思われるようなことを大事にしたい
- 防災メモリアル施設の東北版を仙台にもう1つ作るのではユニークではない

③声、音、身体

- 「ラジオ的なもの」。「声」で伝える。
- 変化し続け、身体的に響き合うためには、たくさんの工夫と技術が必要。その場とは例えば、壁がなく屋根があり鐘が鳴り響くような広場や、次に災害が起きたときに限りなく正しい情報が拠るような場所。(再掲)
- 震災の記憶が今後の社会に対してどういう意味を持つのかということは、自分の体一つで語り継ぐことであり、まずは体を資本に考えるべき。拠点の機能や工夫についても、体から離れず考えていければ、予算に見合うやり方ができるはず(再掲)

④海、水

- 海がキーワードではないか。海は東北、東日本大震災全体につながる。海という自然が教えてくれるものというのは頭で考え、他人に何かを教える以前に、多様性のある人が様々な感じ方で学び起こすことができる可能性がある。学ばなくとも海に触れ感じるだけでも良い(再掲)
- 海は水でできていて、その水というのが自分たちの体に入って命になるし、いろんなことに変化し得るというメタファー(比喩、隠喩)だと考えたときに、それはきっと人の声のようなものとも言える(再掲)
- 海について、物理的に近づくだけでなく高いところから見下ろした海も、震災とのつながりを感じる。これだけ広い海が私たちの周りにあり、自分の視界では見渡せないくらいの範囲で津波を起こした。そういう海との接点もあり得る(再掲)

⑤闇

- 海の中には自分たちが見えない闇のようなものがある。声に出せず、記録にも残らない闇の部分が震災にもある。生と死の循環にある闇を、拠点の中でどう持つかということも忘れておく必要がある(再掲)

⑥広場

- 建物というよりはギリシャ時代のアゴラ(広場)のような場で、学び合い、伝え合う活動の空間が必要(再掲)